

新年を迎ふ

鳥兔匆々、乾坤再び回り來りて明治は茲に四十二回目の春陽を迎ふることゝなりぬ。顧みれば本誌が過ぐる明治三十四年に於て孤々の聲を上げてより卷を重ねること八、號を積むこと約壹百、今や第九卷を會員諸君の机上に呈するの期に際せり。此間本誌が幼兒教育界に貢獻せる處決して尠少にあらず。而も我國の幼兒教育は依然として混沌の間にあり。本會たるもの豈忸怩たらざるを得んや。新春の陽光は人心をして新たならしむものあり。吾人また筆硯を新にして大に盡くすところあらんと欲す。希くは過去に於て本會の爲に多大の同情を寄せられたる諸姉、幸に倍舊の御同情を以て斯界の爲め、吾人の事業を翼賛せられんことを。敢えて會員並に讀者諸君に望む。

フ
レ
ー
ベ
ル
會

幹
事
一
同

